

琵琶で聴く、「大隈重信ものがたり」

作・奏者 薩摩琵琶鶴田流・北原香菜子

監修 大隈重信記念館館長・江口直明

1 大隈八太郎誕生と母の感化

大隈八太郎重信のものがたり 佐賀城下会所小路で産声あげし赤子こそ 後に政治家 早稲田大学創立者 大隈八太郎重信 「玉のような男の子」喜ぶは父信保・佐賀藩の石火矢頭と母三井子 土地の守り神・龍造寺八幡宮の八の字を頂きて名を八太郎とす 時は天保九年二月十六日 「お前は大隈家の跡継ぎ」父の期待を背負うも引つ込み思案でぼんやりさん(ぼーつと生きてんじゃねえよって言われる程の)のんびり屋 「どうか神様仏様 この子を元気の有り余る少年にしてください」と母は願いま 時を見つけては八太郎を高伝寺の槇の木へ登らせ 身心を鍛えん ぐんぐん八太郎は成長し 父母の願い通りの腕白者 六歳で弘道館に入るや否や すばぬけた成績 「でかした八太郎！」父は喜ぶも八太郎13の歳にこの世去る 「心配せんでよか八太郎 お国のために役立つ人になりなさい そのために勉強し仲間をたくさん作りなさい」この母の励ましで八太郎は勉強し十六の春 内生寮に進学す ちょうどその頃黒船でペリー来航 浦賀沖は大騒ぎ その頃八太郎は弘道館の朱子学や葉隠一辺倒の教育に疑問抱き 折から偶然起き

し乱闘に巻き込まれん 八太郎退学処分となる 「心配せんでよか八太郎 あな
たの思うた通りにしたらよか」 母は蘭学寮入学を後押しし 八太郎ますます勉
強し 蘭学のみならず アメリカ帰りの小出千之助の導きで英学も勉強し さら
には長崎へ遊学す ついには宣教師フルベッキより『アメリカの独立宣言』『合衆
国憲法』『聖書』を学び 歴史と教義を深めん このときの土台こそが 八太郎を
世界の大隈重信とならしめん 大隈八太郎重信のものがたり

2 大隈さんの趣味・好みく市島謙吉の記録よりく

大隈さんの趣味好み お菓子は肥前の丸ぼうろ 番茶よりも煎茶好き 牡蠣にご
ま塩かける程塩辛いものの好物で

大隈さんの趣味好み おやつと称して夜九時に ソーメン 寿司を夜食とす 食
後は一合の牛乳を欠かさない

大隈さんの趣味好み 趣味の園芸熱を増し 大隈邸に温室作り 世界の蘭を集め
られ 「ワセダ」という名のメロンを栽培

大隈さんの趣味好み 八百種類の菊育て 観菊会を開かれる そうして人が集い
来て 話をするのが好きという 多事争論 百家争鳴旨として 国内外の人たち
と交流交流交流三昧

大隈さんの趣味好み 読書の量も半端なく 「停滞こそは死滅なり」絶えず動き

絶えず学ぶ 大隈さんの趣味好み

これ全て大隈さんに御供した市島謙吉の記録です

3 大隈のハリー・パークス外交デビュー戦

アヴェマリアマリア 維新政府もキリスト教を禁ずるも 天草や長崎ではキリシタンの数が増え なかでも浦上の信徒等は地元の寺と縁を切り キリスト教の復活を図る

時は(早稻田ではなく)慶応四年 幕府は信徒等を捕らえて弾圧 各国の大使は憤激し 外交問題に発展す この問題に対処できん者として 三十一歳の大隈が選ばれん 時は(早稻田ではなく)慶応四年閏四月の三日 大阪東本願寺別院にて 英国大使 高飛車で名高いハリー・パークスと対面す 開口一番 パークスの怒声 「I can not negotiate with such a junior guy like Okuma!」 「わたくしの

ような身分の低き者とは交渉できないと わたくしは天皇の命によりここにおります これを拒むは自らこれまでの抗議を撤回したものとして心得ん」大隈の言葉にパークスの顔はひきつり ししぶ交渉はじめん 「今すぐキリスト教徒等を釈放し 信仰の自由を認めよ」パークスの烈火の如き糾弾に 大隈は慌てず騒がず堂々と 「この件はわが国の内政問題 わが国の法律を以てわが国の人民を罰したまで 外国の干渉を受ける理由は少しもなし」と論ずれば パークスの頭

に血が上り 「What a rubbish! Freedom of religion must be guaranteed at once, otherwise Japan will perish!」

「宗教の自由を認めない日本は滅びる!とパークス氏はおっしゃっています」(と、このときの通訳係は、シーボルトのご子息でした)

「What a rubbish! Freedom of religion must be guaranteed at once, otherwise Japan will perish!」とテーブル叩いて立ち上がる 大隈はニッコと打ち笑みきつぱりと「国が滅びる時とは外国の意見を鵜呑みにした時」とはねのけん さすがのパークスも返す言葉見当たらず 抗議沙汰止み 居並ぶ公家や高官は胸なでおろし 「あっぱれ大隈!」と声上げん

4 近代の土台作りく鬼の居ぬ間に洗濯く

江戸は東京 元号は慶応から早稲田ではなく 明治に改元 大隈も上京して参議に昇進 築地本願寺の脇に邸宅を構えん そこには薩摩藩士の五代友厚 長州の伊藤博文 井上馨 山県有朋 渋沢栄一 前島密等が出入りし 連日新国家建設について 口角泡を飛ばす その有り様があたかも中国の『水滸伝』に出てくる豪傑連中の巢窟・梁山泊に似ていることから“築地の梁山泊”と呼ばれたとか そもそも大隈重信が参議となるを受けたのは 幕府が交わした日米の不平等な条約を対等にせむため 新国家の土台を築かむためと条約改正に取りかかる

大隈は自身が米国に趣て交渉せむと意気込むも 薩長藩連中の反発招き なかでも大久保利通は断固反対！大隈を除外した岩倉具視が中心の百余名もの人々の使節団を作り上げ 二年に及ぶ欧米外遊 政府留守なか大隈は 鬼の居ぬ間に洗濯と多岐に渡る仕事をす

○義務教育を取り入れる○新橋横浜間に鉄道を敷く○人身売買を禁止する○太陽暦を採用○四民平等・郵便制度を確立○番と刀の廃止○お坊さんの肉食妻帯を許す などなど 今に繋がる土台なり

明治六年に帰国した岩倉一行は、国内の様相が一変していることに驚愕 岩倉具視は自らの政治生命を保つため征韓論争に事寄せて留守政府を辞職に追い込むこれが明治六年の政変 大隈も留守政府のひとりではあつたが、大久保利通とタッグを組み近代化を推進する道を選ぶ 翌年佐賀の乱勃発 江藤新平以下友人知人を失う このときの思いを大隈は自叙伝の中でこう述べています。

過去は追うべからずと思うも 実に千載の痛恨事なり

5 東京専門学校設立―一国の独立は学問の独立から―

時は明治十年 西南戦争勃発

今を最期と戦いて 薩摩隼人の武勇をば 語り継がせよ者共と 獅子奮迅と荒れ廻る 一弾飛んで隆盛が腹をどつとぞ打ち貫きける

孤軍奮闘囲みを破って還る 一百の里程累壁の間 吾が剣既に折れ 吾が馬は倒る 秋風骨を埋む故郷の山（古典曲「西郷隆盛」より）

この西郷隆盛の死をもって西南戦争終結 翌年大久保利通が紀尾井坂で暗殺されるや明治政府のトップは四十一歳の大隈重信となるが そこに立ちはだかるは藩閥政治の一点張り 「これではならぬ！藩閥政治ではならぬ！これからは立憲政治すなわち、憲法を定めて選挙で代表を選び、国会で審議をする民主主義を進めんべき」と声あげん されどこれに反対政府が続出し さらに大隈が政府転覆を狙いしとあらぬ噂を流されて ついには政府より罷免追放！

「こう云う有様で、我輩はトウトウ追放されてしまった。これが世に謂うところの明治十四年の政変、いわゆる我輩の失脚である」（と、大隈さんは語っています）大隈はあくまでも民主主義で国家をつくるべきと立憲改進黨を結成し その国家をつくる担い手を育てん教育が必要と 私財を投げうち 東京専門学校を（後の早稲田大学を）創立す

当時、国がつくった大学、帝国大学では、外国人教授によって、外国の教科書を使用し、外国語で授業が行われていた。このような状況に対して大隈は、「学問の独立」を提唱―すなわち、先進諸国の学問の受け売りではなく、日本人の日本語による学問、他国の文化から独立した自由な学問の研究所をつくらねばと考えた 一国の独立は国民が独立していること 国民の独立は精神の独立が必要 精神の

独立は学問の独立によって完うできるところに提唱　学問の独立なくして一国の独立はなし、と宣言す

とはいえ、東京専門学校が立憲改進黨員の養成所であると疑われていることを察した大隈が、開校式に現れることはなかった

6　爆弾と切断と花束と　　条約改正を巡って

明治時代の最大の問題外交問題　江戸時代に交わした不平等条約を一刻も早く対等で平等な条約にして　日本を独立へ進めたい　そのために今こそ大隈が必要と大隈でなければ国は治まらぬと　大隈重信民衆の声に後押されて　再び内閣に戻される

かくして外務大臣となりし大隈重信は　少しも動かぬ条約改正問題を一国ずつ直接に交渉進めんかたちで取りかかる

「何故わたしの案を認めぬか」と大隈の声に山県有朋は「大隈君　我々は最高裁に外国人判事を入れることにどうしても賛成できぬ　日本人を裁く裁判に外国人を入れるとは何事ぞ　国民にも反対意見を持つ過激派あり」と答えんと　大隈は「そうとはいえ　我が国に不利な条約を一步步つ変えていかねばならん」と憤懣の気をおさえて席を立ち　帰りの馬車に乗り込まん

徐々に馬車の速度がおちる　とそのとき馬車に爆弾投げられん　大隈の右足は血

潮に染まり（このとき綾子夫人は大隈の右足切断を即決断これぞ英断）

うすれゆく意識のなかで大隈は「他に怪我をした者はないか 爆弾を投げた者はどうしたか」と声かけん

「犯人は福岡玄洋社の来島恒喜 その場で喉をかつ切り自害す」との報告に 大隈は深く頷き「手段の間違ひはあれど今の日本に必要な志士なり」と 毎年来島の命日に 花束を手向け続けん

7 大隈さんの名演説―卒業生諸君へ―

「卒業生諸君よ 今日此名譽ある得業の証書を貰って始めて社会に御出になるのは先づ謂はゞ複雑なる社会に於て百戦奮闘する初陣である 所が中々初陣といふものは余程六ヶしい どうも諸君が向ふ所には種々の敵が沢山ある 種々の伏兵にも出会ふ 此敵に向つて諸君は必ず失敗をする 随分失敗をする 又成功があるかもしれないけれども成功より失敗が多い 失敗に落胆しなさんな 失敗に打勝たなければならぬ 度々失敗するとそれで此大切な経験を得る 其経験に依つて以て成功を期さなければならぬのである」

このときはじめて大隈は 自ら設立した東京専門学校の創立十五周年式典に出席し 同時に行われた卒業式で演説 「卒業生諸君よ 必ず失敗する その失敗からこそ学びの機会を得る 複雑なる社会の大海原を航海するためには学問という

羅針盤が必要 この先も、學問をやめてはならぬ」

この演説から五年後の明治三十五年 東京専門学校は早稲田大学と名を改める
「この先もずっと學問をやめてはならぬ」

8 人生は百二十五年、希望は人を長寿にす

「野口英世君よ 人生は百二十五歳説の考えをどう思うか 聞かせてくれ」

時は大正四年 大隈邸を訪ねし細菌学者の野口英世は 時の総理大臣大隈重信に
何と答えしか 「人間の体は精神と肉体から成り立ち主従関係にある 仰せの通
り生理養生の法則を守らば百二十五歳の長寿は疑いなし」と静かに、答えん

そもそも大隈さんが「人生百二十五歳説」を提唱したのは、友人で歴史家の久米
邦武から、アメリカの新聞に「人間は百二十五歳まで生きられる」と載っていた
ことを聞き、それに影響を受けたからかもしれません。百二十五歳説の根拠を紐
解くと、生物は成熟期のおよそ五倍の寿命を持っており、仮に人間の成熟期を二
十五歳ぐらいとすれば、その五倍、百二十五歳ぐらいの寿命はあるはずだとい
うことです。「根拠薄弱！」と大隈さんはおっしゃっていますが、伝えたかったこと
は数字ではなく、気持ちを常に愉快に若々しく持つこと、前向きであることが長
寿へつながる、ということです。

大隈さん自ら語る、こんなエピソードがあります。

「あるとき我輩が山陰道を旅し折　そこに古来長寿を保ちし人物と年齒が列挙し
貼り出されん　そのなかに我輩の名もあり　百二十五歳と記されん」

それを見し信じた地方の者たちは　我輩が演説をはじめんと「大隈さんは若いな」
と言う　このとき我輩七十八歳　思わず噴き出さん　さらに驚きしは　我輩の演
説が終わるや　演台に飲み残したコップの水を　群衆が長寿にあやからんと争い
て　飲まんとする姿あり

希望は人を長寿にすゝ

9 大隈邸に集う人々「平和」と「調和」の会話

都の西北　早稻田邸には　連日内外の客人絶え間なく　例えば　エドワード・ハ
リマン　アメリカの鉄道王　アルベール・カーン　フランス大富豪　野口英世
清国の康有為　中国の孫文　連日内外の客人絶え間なく

時は大正五年　水無月十日の頃かとよ　首相在任中の大隈重信は羽織袴を身につ
けて　インドの詩人タゴールを迎えん　大隈は自慢の庭園を案内し　そこを前に
歓談す

そもそも何故タゴールが大隈邸を訪ねたのか。それは大隈さんが日印協会の二代
目会長であったことも理由のひとつです。この頃の大隈さんは日印協会や日蘭協
会など、ゆうに百を超える活動にかかわり、そのほとんどが「東西文明の調和」

という理念の基に行っていた。

この大隈さんの言う「東西文明の調和」とは、日露戦争開戦後に編纂に取りかかった『開国五十年史』に述べられています。又、早稲田大学校歌第二番の歌詞にも織り込まれています。

「開国以来五十年の日本の発展は、西洋文明を受け入れ応用することによって成し遂げられた。これからは単に受け入れるだけではなく、日本が東洋文明を西洋に広め、さらには東西両文明を融合し、各国の勢いをバランスの良いものにしていくこと 進んだ文明がそうでない文明を圧倒する様では、争いはなくなならない。「東西文明の調和」「世界平和」であるのである！」（と大隈さんは常々、方々でおっしゃっています。）

そのことを取り上げタゴールは「西洋の知的物質文明は早晚滅亡すべきなり」と話さんと 「いやいやタゴールさん 西洋文明とても一概に排斥すべきでなし我が国は西洋文明の短所を去り 東洋文明の長所を加味し 両文明を調和して新たな文明を創らんことこそ使命なり ♪東西古今の文化のうしほ 一つに渦巻く大島国の 大なる使命を担いて立てる われらが行手は きわまり知らず」

大隈の口ずさむ早稲田の校歌にタゴールはまなこを閉じて聴き入らん

10 大隈流アンガーマネジメント〜生きる智慧〜

「大隈さん、わたくし市島思います 腹立つことはないですか？」 「それは

ね謙吉君 我輩なりにあるんだよ 怒りを鎮める方法が」

フロ サケ ネル ナムアミダブツ

フロ サケ ネル ナムアミダブツ

「あるのである 我輩も癪に障ることもあるのである そんなときは風呂入り
石鹸用いず大袋に糠入れて ごしごしごしごしごしごしごしごしごし体を摩擦 次第
に自然に癪癢が和らいでくるのである それでも怒りが鎮まぬ時は 一杯の酒を
飲むのである それでもそれでもおさまらぬ時の手段は寝るのである 一切の怒
りは一切なくなってしまうのである そして何よりナムアミダブツナムアミダブ
ツ 母の教えがあるのである」

幼き時分 けんかっぱやい我輩に 「八太郎！喧嘩をはじめるその前にナムアミ
ダブツと十編のお念仏を唱えなさい！ それでも怒りが消えぬならその時はじめ
て喧嘩をせいっ！」と母の教えのナムアミダブツ 「謙吉君良いかね 追懷する
な愚痴になる 前途に希望 抱負あり」

11 寿の命、一九二二年 一月一〇日 午前四時三十八分

、

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり

「我輩の人生は百二十五年と思ふていたが　これより早く死ぬるのは早世、夭死であるのである」と語る大隈重信は　大正十年　病に倒れ　早稻田邸にて静養す大隈は自らの死期を悟りてか　養子の信常には文明協会後任を　高田早苗には早稻田大学の後事を託さん　来るべき日本のことは若人にと微笑まん　あくる大正十一年　大隈の快復見込みなく　睦月一〇日の早朝に八十五年の生涯を全うせり大隈さんに四十年来随行した市島謙吉は我を忘れて慟哭し　その側で綾子夫人は涙一滴こぼさずに　大隈の唇にそつと、　天皇より下賜されし葡萄酒を注がん一月十七日、日比谷公園で大隈の国民葬が行われた。沿道には百万を越える人の数　「ああ大隈侯」と別れを惜しむ人々の声響きける帝都の御空

12　大隈重信讃く大隈さんの残したものはく

さても大隈重信は　明治維三十年前の佐賀城下会所小路で生を享け　絶えず学び行動し　近代日本の舵を取り　貨幣制度をはじめとし　電信鉄道の建設や郵便制度を築き上げ　文明社会を切り開く　次代を担う人作り「進取の精神」「学の独立」提唱し　早稻田大学を創立す　雄々しき魂八十五歳　あゝ大隈侯　日本の宝　世界の偉人　彼の手腕は尚ほ鳴りて　余香いやます　とこしえに、
三世諸仏之供養時　照見五蘊皆空度一切苦厄諸々　色即是空空即是色　無意識界以開悟　得阿耨多羅三藐三菩提　琵琶の音に乗り　今一度の成仏を